

白鷗大学教育学部論集
2010, 4(1), 7-20

退職記念寄稿

人生のA面とB面

— 定年退職にあたって —

馬 場 将 光

はじめに

一昔前のレコード盤には中心的な曲が入っているA面（表面）とついでに出される曲のB面（裏面）とがあった。今頃A面とかB面と言ってみても、その言葉を知っている人はすでに少数派になっているかも知れない。われわれの人生にも、仕事をばりばりとして目立つA面と、どことなく目立たない、外からみると何をしているのかわからないように思えるB面とがある。

これが1番はっきりしているのは、例えば芸能界やスポーツ界の有名人であろう。どんな著名な女優であろうとスポットライトをあびる華々しい側面があるかと思えば、そういう派手なものとかげ離れたもっと堅実な地味な個人の私生活の側面というものがあるはずである。また喜劇俳優はいつもあのように面白く周囲の人を楽しませているかという、決してそうではなく、面白く笑わせてくれる喜劇俳優ほど、じつは私生活は生真面目で少しも面白くない人が多い、と聞く。

われわれ1人ひとりの生活もそれに似ていて、外から見えるA面とは違ったところにみなそれとは違ったB面をもっている。わたしの場合もそうである。A面は大学で働く教師の顔であり、B面の生活というのはじつは仕事から離れ副次的な趣味を楽しむ顔である。そこで、今回、定年退職にあたって、わたしの人生のA面とB面について思い出風にメモをしてみ

たいと思う。

わたしの人生のA面

わたしの研究活動は大学院修士課程の修士論文に始まる。たまたまイギリスの教育史家のブリアン・サイモン『新大学』という著書を読んでいたら、そこに当時イギリスの大学に財政支出をする大学補助金委員会という機関があって、その性格、機能は「金を出すが、口は出さない」ことを原則にし、イギリス大学にとってはじつにすばらしい制度であるということが記されていた。わたしは、国が金を出すと同時に国家管理もばっちりする日本の大学と国家の関係とは随分違うものがイギリスにはあるのだなあ、と考えていた。

ところが、次のパラグラフに、「でも、じつはこの制度にはここまで来るのには長い歴史があったのだ。」と書かれていたのであった。「え〜？」と思って、いろいろと文献に当たってみたが、その大学補助金委員会について詳細に調べたものに会えることはなかった。そこで、では、仕方ない、自分で調べることにするか、と考えて調べ始めることにした。それをまとめたものが修士論文『イギリス大学補助金委員会の研究』であった。

わたしは気が長いというか、食いついたらそう簡単にそれを放さないというか、執念深いというか（嫌な性格！）、自分でもよくわからないが、そのような気質の影響があって、いわゆる大学補助金委員会前史の研究をそれから30歳代、そして40歳代と継続して没頭することになった。その間に29歳のときに2ヶ月（私費）、37歳のときに文部省の在外研究員として1年（公費）、それから43歳のときに3ヶ月（私費）、この研究を集大成させるためにイギリスへ出かけた。その研究成果は東京教育大学教育学部紀要、熊本大学教育学部紀要、信州大学教育学部紀要に38回わたって、それから研究会・学会機関誌等にも6回継続的に発表してきた。

今から2年ぐらい前であろうか。もう歳も歳であるから、この継続研究

を1冊にまとめようと考えて、その作業に取りかかることにした。同僚の樋口和彦教授に紀要論文をパソコンに読み込んで、そこで手を入れればそれも可能であるとお聞きし、パソコン操作方法をご指導いただいたのであるが、いざ始めてみると、これが予想以上に時間がかかること、パソコンへの読み込みが100%ではなく随所にミスが発生してしまうこと、こうした作業に対するわたしの視力・眼力は1日精々2時間が限界であることがわかってきた。

歳をとると諦めるのが速くなるのであろうか。「このペースでは仕事を最後まで終わらせるのは無理だ!」と直感し、この作業はたったの2日で諦めることにした。その結果、次善策として、それらの研究論文をそのままコピーし、それを1冊の冊子にまとめることにした。それが、これである。印刷経費は大学の個人研究費を使わせていただいたので、大学名を入れさせていただいた。

馬場 将光『イギリスにおける大学財政国庫補助制度の展開』平成20年3月、白鷗大学、501頁。(私家版)

50歳頭に突然に信州大学で大学の学生部長を務めるハプニングがあって、ここで研究生生活に2年間のブランクができてしまったが、そのとき遭遇した出来事がその後の研究を従前とはまったく異なる方向へ急旋回させることになった。事の発端は信州大学の大学評価に関する調査団の一員としてイギリスを訪問し、イギリスの大学評価を調査したのであるが、研究の急旋回はそのときお世話になったロンドン大学SOAS（オリエント・アフリカ学部）に勤務していらした杉原薫教授（経済学）との出会いが契機であった。帰国後鄭重なお礼状を差し上げたのであるが、それへの返事にこんなことが書かれていた。「馬場さん、日本には世界に発信できる新しいアイデアがありますか!」この言葉は当時のわたしに強烈な衝撃を与えた。まるでパンチで頭を打たれたような気がした。

「そうだ。今までのように外国のいいところを研究し日本に輸入するのではなく、日本の制度を分析しそのアイデアを外国へ輸出しなければな

らないのだ！」そのとき、わたしはそのことを初めて認識することになった。そのときすでに52歳になっていた。それからというもの、わたしの研究姿勢は一変し、もっぱら国際学会へ出かけて行き、そこで発表し、批判を頂戴し、それを参考にし、論文を再構成し、うまくまとまったと思えるものを主にヨーロッパの国際誌へ投稿することにした。国際学会での発表回数は合計で26回になった。

こうして、国際学会へ参加をすることになったのであるが、参加してみると日本人の参加者が極端に少ないことに気づいた。自然科学の分野ではそういうことはないかと推測するが、教育学の分野では日本人の参加者はほとんどいなかった。いや、ゼロの場合がほとんどであった。そこで、わたしは、国際学会には国内の若い研究者を誘って参加するようにした。将来、彼らがこの種の国際学会に参加し発表してほしいと思ったからであった。

さらに、正直に言うと、そこにはもうひとつの大きな問題があった。それは学会へ参加するための経費の問題であった。1回の参加に平均25～30万円かかったが、大学はもちろんだれもこの経費を出してくれることはなかった。念のために言うと、当時の大学の出張旅費は1年間に4万円ぐらいであったと思う。このときから、わたしはひどい貧乏生活を余儀なくされることになった。貧乏であることに恥ずかしさを感じることはなかったが、それはじつに不便でかつ疲れるものであることを知った。でも、この貧乏生活はわたしに忍耐の大切さを教えてくれた。

以下のものは、国際学会発表のProceedingsと国際セミナーの講演論文を除き外国のジャーナル・著書（分担執筆）等に採択された論文である。

- 「The evaluation of the higher education in Japan」 Robert Cowen (ed); *The Evaluation of Higher Education Systems*, Kogan Page (London,UK) 平成8年2月
- 「The Japanese University's Role in In-service Education for School Teachers」*ITEC 95: Teacher Education in the Asian Region*, University of Hong Kong (香港) 平成8年6月
- 「The Changing Role of JUAA in Japanese University Evaluation」*Assessment and*

Evaluation in Higher Education, 22(3), Carfax (UK) 平成9年9月

- 「Government Funding Versus Private Funding in Japanese Universities」 *Quality in Higher Education*, 3(3), Carfax (UK) 平成9年11月
- 「The Market Structure for Private Universities in Japan: How Has Japan Achieved Mass Higher Education in the Public Sector?」 *Tertiary Education and Management (The Journal of EAIR)*, 4(2), Jessica Kingsley (UK) 平成10年6月
- 「Academic Degree Conferment in the UK and Japan Excluding Universities」 *Higher Education Policy*, 12(1), Pergamon (The Netherlands) 平成11年4月
- 「The New Role of the JUA in Japanese University Education」 *Assessment and Evaluation in Higher Education*, 25(1), Carfax (UK) 平成12年1月
- 「Contemporary Development of Research Cooperation in University-industry Relations in Japan」 *Industry and Higher Education*, 14(1), IP (UK) 平成12年2月
- 「Setting Tuition Fees in Institutions of Higher Education: supporting a public service, or charging what the market will pay?」 *Journal of Further and Higher Education*, 24(3), Carfax (UK) 平成12年12月
- 「What universities can learn from corporation about quality control of students: A proposal from a Japanese perspective」 *Total Quality Management*, 12(2), Routledge (UK) 平成13年3月
- 「The Rationale Behind Public Funding of Private Universities in Japan」 *Higher Education Management and Policy* (フランス語版あり), 14(1), OECD (France) 平成15年4月
- 「Who Should Pay for Higher Education: a Japanese Perspective」 *Higher Education in Europe*, UNESCO-CEPES, 28(4), Taylor & Francis (UK) 平成15年12月

以上の論文を含めて、わたしが書いた英文論文は下記の冊子にまとめている。

Masateru Baba ; Research Papers on Higher Education Systems in Japan, 平成20年3月、259頁。(私家版)

わたしの人生のB面

わたしの人生のB面のひとつは、30歳代から始めた遠歩（ただ遠い距離を歩くだけ）と50歳代を中心に楽しんだ市民マラソンである。遠歩は熊本時代にトライした阿蘇山山頂のロープウェイの乗り場の広場を夜中の12時にスタートして熊本大学までの約60kmをただひたすら歩くという大学のイベントであった。阿蘇山の山下りが20kmそして平地の徒歩が40kmであった。わたしが大学へ着く頃はスタートしてから約12時間後の昼の12時頃であった。膝が痛くなってゴールしたらそのまま入院しようかとも思ったほど、足は痛んでしまっていた。

長野では学生を毎回100名ほど長野駅から黒姫駅まで電車で連れていって、そこで出席をとってこれに参加した者には試験の点数にさらに10点与えると言って学生を喜ばせ、そこから山に登り戸隠神社の前を通過して長野の善光寺まで歩くという登山と遠歩を楽しむもので、夕方7時頃黒姫駅を出て善光寺には朝6時頃ゴールするものであった。こちらは、わたしが私的に企画していた。この2つの遠歩はともに夜中にただひたすら暗い道を歩くところに特徴があった。

市民マラソンというのは素人の市民がただ一定の距離を走るというもので、走ることが楽しくてたまらなくてそれを趣味のように考えている者の同好会であったが、時代が進むにつれて次第に一大イベントのようになってきた。わたしは春と秋に長野市近郊のあちらこちらの市民マラソンの大会に出て、ただ走っていた。この大会で何が楽しいかと言えば、なんと言ってもゴールしたときの達成感である。「やった」という達成感というか充実感は何度味わってもたまらなくいい。最高である。この満足感を味わうために走っていると言っても過言ではない。参加種目は10kmという短い距離のもので、時間は約60分かかり、順位はどのくらいかというと、後ろから数えて5～6番であった。決して速いランナーではなかった。それでも途中でリタイアしたことは1度もなく、すべての大会で完走した。2回

だけハーフマラソン（約21km）に参加したが、そのときの時間はともに2時間15分ぐらいかかったと思う。ゴールしたとき、感動のあまり、「やった！」と思わず両手を高く挙げてしまった。

しかし、60歳代に入ったら、医者から「君は腎臓が悪いのだからぼつぼつそのような大会に参加するのは止めて、散歩でもするようにした方がいいだろう」と言われ、その忠告を素直に受け入れ、今は夕方1時間ほどのウォーキングを楽しんでいる。でも気分がよいと、ウォーキングの帰りの2.5kmはなぜか走ってしまう。習性というものは、恐ろしいものだ。

（遠 歩）

昭和50年：阿蘇山頂～熊本大学（60km）

昭和51年：阿蘇山頂～熊本大学（60km）

昭和59年：黒姫駅～善光寺（38.5km）

昭和60年：黒姫駅～善光寺（38.5km）

昭和61年：黒姫駅～善光寺（38.5km）

昭和62年：黒姫駅～善光寺（38.5km）

昭和63年：黒姫駅～善光寺（38.5km）

（市民マラソン）

平成7年：飯綱高原健康マラソン

平成8年：飯綱高原健康マラソン、滝の里須坂健康マラソン全国大会、聖高原ロードレース

平成9年：飯綱高原健康マラソン、三郷アップルマラソンin 安曇野大会、カチューシャマラソン大会、木島平健康マラソンケヤキの森大会、そばの里戸隠高原健康マラソン大会、諏訪湖マラソン

平成10年：NAGANO飯綱高原健康マラソン、カチューシャマラソン大会、木島平健康マラソンケヤキの森大会、諏訪湖マラソン、善光寺初詣マラソン大会、野沢温泉菜の花健康マラソン、ロードレース in 軽井沢、松本すすき川お盆駅伝、あずみ野池田ハーフマラソン大会、長野走ろう会例会2回参加

平成11年:三郷アップルマラソンin 安曇野大会、ロードレース in 軽井沢、松本す
すき川お盆駅伝、あずみ野池田ハーフマラソン大会、滝の里須坂健
康マラソン全国大会、千曲川ロードレース大会

平成12年:三郷アップルマラソンin 安曇野大会、ロードレース in 軽井沢、滝の里
須坂健康マラソン全国大会

平成13年:滝の里須坂健康マラソン全国大会

平成14年:滝の里須坂健康マラソン全国大会、佐久鯉マラソン大会

ふたつは、夏山登山を楽しむというものである。山友達が2人いて、い
つも3人で2000～3000m前後の山を中心に登っていた。富士山は高いとい
うより大きな山であることを知ったし、2番目に高い北岳は登り始めてか
ら頂上に着くまでに6～7時間かかったような気がした。北岳では山小屋
のおやじさんに「よく来たねえ」と言われたから、思わず「北岳だけに、
ただ、来ただけ」とだじゃれをいったら、「だじゃれが出るうちはまだ元気
な証拠だ。もう一山登ってこい。」とからかわれたことを思い出す。さらに
北岳では山小屋の前でブロッケン現象に遭遇し、自然現象の神秘さに感動
してしまった。50mぐらい下の虹の中に自分の姿が映し出されていたのだ。

なぜ山に登るかという、こちらも頂上についたときの達成感というか
満足感を味わうためである。それと頂上で食べる「むすび」のうまさであ
る。このうまさは、何と表現したらいいかわからないほど、最高にうまい
のだ。三ツ星レストラン（もちろん、そんなレストランへは行ったことは
ないが。。）なんかよりずーとうまいと思っている。

夏山登山をするとき、わたしは毎回必ずすることがある。ちょっとした
癖になっている。なにかというと、中年ぐらいのご夫婦にお会いすると、
必ずこう挨拶をするというか声をかける。「今日はお父さんとお嬢さまの登
山ですか。いいですねえ。羨ましいですよ。」外見はどうみても中年のご夫
婦である。でも、「お父さんとお嬢さま」という言い方をすると、奥様の方
が必ず「わたし、そんなに若く見えますか。嬉しいわ!」と答える。それ
を聞いて、わたしは内心「あ～あ、今日もひとついいことをした。」と自己

満足するのである。

(夏山登山)

平成4年：大峰山(828)、戸隠山(1907)、飯綱山(1917)、頼朝山(809)、旭山(784)

平成5年：大峰山、頼朝山、飯綱山、八方山第2ケルン、黒姫山(2053)

平成6年：火打山(2462)

平成7年：飯綱山、黒姫山、妙高山(2446)

平成11年：黒姫山、四何山(2332)、根子岳(2207)

平成12年：富士山(3776)、乗鞍岳(3021)

平成13年：浅間山(2568)、御岳山(3067)、蓼科山(2503)

平成14年：飯綱山、仙丈岳(3033)、八ヶ岳赤岳(2899)

平成15年：飯綱山、金峰山(2599)

平成16年：北岳(3128)、雨飾山(1963)

平成17年：太郎山(1164)、烏帽子岳(2066)、湯の丸山(2098)

平成18年：太郎山、甲斐駒ヶ岳(2966)

平成19年：太郎山、冠着山(1252)

平成20年：太郎山

平成21年：太郎山、甲武信ヶ岳(2475)

3つは、一昨年から始めた野菜づくりである。今までは庭の隅に野菜をつくったことはあったが、一昨年から本格的に畑に野菜をつくり始めた。友人たちからは「百姓でも始めたのかい？」とからかわれているが、わたしはいたって真面目に野菜づくりを始めた。春に苗を買ってきて、畑に植えて育てている。育てた野菜はカボチャ、トマト、ピーマン、人参、丘ひじき、大根、ネギ、ジャガイモ、そして秋蒔くタマネギ、ほうれん草といった野菜である。

野菜づくりを始めてみると、これが結構楽しくて、用もないのに畑まで野菜の育ち具合を見に出かけたりしてしまう。どうやら、わたしには農耕民族のDNAが繰り込まれているとみえて、野菜づくりをしていると、気持

ちが和むのである。いや、はっきり言えば、癒されるような気分になるのである。これから当分、わたしは野菜づくりから離れることはできそうにない。「歳をとったら野菜づくり」というのは、わたしと同じように農耕民族のDNAお持ちの方にはお勧めである。昨年うまくいったのは、ジャガイモ、ネギ、カボチャであった。わが家で食べるに十分な収穫があったし、それぞれが味もよく、大満足している。

4つは、旅行に出かけることである。わたしは、知らない街をリュックを背負って1人で歩くことになぜか精神的な興奮を覚える。その手助けをしてくれたのが、国際学会であった。外国で自分の専門に関係する国際学会があると、いそいそと出かけて行く。発表をすることもあれば、しないこともある。

学会では研究発表をしてもしなくてもいいのであるが、根が真面目であるためか（だれも信じてくれない!）、参加した国際学会ではほとんど発表してきた。でも、わたしの目的は知らない街をただ1人で歩くことにある。だから、1人で歩いているときは、もう気力は充実するし高揚するし、身体は10歳ぐらい若返ったような気分になる。50歳代にはそんな知らない街ヘジョギングをできる準備をして行って、知らない街をジョギングの格好をして走っていた。そんなときは、もう気分は最高であった。そんな訳で、知らない街を歩くために外国へ出かけた回数は、国際学会へ参加したのを含めてすでに53回になる。

国際学会での研究発表は副産物をもたらした。それはいくつかの国に親しい友人ができたことである。アメリカ、ニュージーランド、中国、台湾、オーストリア、ドイツ、イギリス。これらの国には親しくさせてもらっている友人がいる。もうひとつの副産物は、美術・音楽の観賞の楽しみを享受できたことであった。わたしは都市を訪問すると、必ずその美術館を訪ねよく絵画を観てまわった。また夜にはミュージカル、バレエ、クラシック、ジャズ、オペラ（1回だけ）を楽しんだ。しかし、海外旅行はいいことばかりではなかった。イヤなこと、危険なこともあった。詐欺師にあっ

たり、地下鉄で暴力窃盗団に囲まれたりしたこともあったが、まあ、なんとか実害もなくくぐり抜けることができたのは、不幸中の幸いであった。

(海外渡航)

昭和44年：イギリス・フランス・ドイツ・スイス

昭和54年：イギリス・アイルランド

昭和58年：イギリス・アイルランド

平成3年：中国

平成5年：アメリカ、イギリス

平成6年：香港

平成7年：オーストラリア、台湾、香港

平成8年：中国、マレーシア

平成9年：メキシコ、アメリカ、イギリス

平成10年：アメリカ、中国、南アフリカ、スペイン

平成11年：オマーン・タイ、カナダ、イギリス、スウェーデン、イギリス

平成12年：アメリカ、スペイン、オーストラリア、イタリア、韓国、イギリス・
ポーランド

平成13年：ベルギー・ポルトガル、イギリス・ドイツ

平成14年：アメリカ、トルコ、ハンガリー・オーストリア、チェコ・オーストリア、
インド

平成15年：フランス、ドイツ、ベトナム・カンボジア、タイ

平成16年：デンマーク・イタリア、台湾

平成17年：アメリカ、オランダ・スペイン、フィンランド・エストニア、

平成18年：アメリカ、スウェーデン、タイ・ミャンマー、

平成19年：モロッコ、イタリア・スロベニア、

平成20年：アメリカ、ハンガリー、

5つは、こんなことを言うと思われてしまうが、じつは随筆を書くことである。一身に二生（福沢諭吉）と言えば格好はいいのであるが、それほどのことでもない。わたしは63歳まで真面目にアカデミックな論文を書い

てきたが、その時なぜか突然気力・体力が切れてしまって、アカデミックなことを継続するスタミナがなくなってしまった。そこで急に思いついて始めたのが、この随筆の執筆である。

最近「自分史」という自分の生涯史を書くのが流行っている。自分の人生の中で思い出に残っていること、その時は言えなかったが今なら言えること、改めて自分の人生を反芻してみることなど、いろいろな理由から自分の人生の記録を言葉にして残しておきたいという願望が、そのような自分史の執筆へと導いているようである。

わたしのこのエッセイは、そこまで明快な人生の思い出、記録さらにはその時わたしはこう動いたことへの分析がある訳ではない。単にその日その時、わたしがこう考えていた、こう感じていた、あるいは妄想していたことを記しただけである。独断と偏見に満ちた内容を躊躇いもなく記しただけである。

その特徴をあえて言えば、わたしはあまり生真面目に物事を捉えるより、結構笑いやユーモアを楽しむことが好きであるから、そのために物事を正面から見るとよりも多少斜に構えて見るのが好きで、そのことを自分では積極的に楽しんでいただことであった。だから、パソコンに向かっていたときは、気分は最高に高揚し、ニヤニヤしながら、頭に浮いたことを素直に書いていただけであった。

そのときから毎年240～260頁ぐらいのものをまとめて100冊ぐらい仮製本して、親しくさせていただいている人に届けさせてもらってきた。親しくさせていただいている人であるから、みな顔なじみの諸氏である。その結果、昨年で8冊目を作ることになった。総頁で約2000頁になった。われながら、こんな馬鹿げたことを、よくもまあ、ここまで続けてきたものだとあきれてしまうが、そんな姿がわたしのもうひとつの姿である。このエッセイは、海外見聞記、社会を斬る、老化放談、私生活の周辺、わたしの趣味、大学キャンパスの6項目に分けて編集している。このなかで読者からご意見をいただくのは、もっぱら老化放談である。人はみな同じ老化の途

を辿るらしく、「納得がいく」「そうだ、そうだ」という声をよく頂戴する。

随筆の著者、阿見 貞治というのは、わたしのペンネームである。イギリスのシェフィールド大学で1年間お世話になったとき、わたしを教員として受け入れてくださったのが、同大学のアーミテイジ教授であった。そのために、どこへ出かけてもIDカードを見せると、シェフィールド大学の教員として通ったのである。その親切なご配慮が忘れられなくて、彼の名前を拝借しペンネームとして使わせていただいた。

このエッセイは、自分から言うのも変であるが、意外に愛読者の受けがいい。1回送らせていただくと、必ず「次号も送れ!」という要請がくる。その理由は、多分、あまりに馬鹿げていたり、ふざけていたりして、気楽に楽しく読めるからではないだろうか、と想像している。

(随筆執筆)

阿見 貞治「ひとくちエッセイ1 西欧風寄り道」平成15年9月

阿見 貞治「ひとくちエッセイ2 西欧風廻り道」平成16年3月

阿見 貞治「ひとくちエッセイ3 西欧風帰り道」平成17年3月

阿見 貞治「ひとくちエッセイ4 西欧風登り道」平成18年4月

阿見 貞治「ひとくちエッセイ5 西欧風戻り道」平成19年1月

阿見 貞治「ひとくちエッセイ6 西欧風辿り道」平成19年11月

阿見 貞治「ひとくちエッセイ7 西欧風散歩道」平成21年1月

阿見 貞治「ひとくちエッセイ8 西欧風並木道」平成21年11月

こんなところが、わたしの人生のB面というところであらうか。

おわりに

70歳になり大学を去るにあたって、自分の過去を振り返ってみると、平凡なひとりの大学教師がなし得ることなどたかが知れていて、それはじつに些細なものであったことに気づく。これと言って、記録に残るようなことは何もないし、人様のお役にたったようなことも何もない。したことと

言えば、その時、その時の精一杯の努力と単なる自己満足の蓄積に過ぎなかったような気がする。なにも残すものはなく、人生が終わってしまったようだ。

でも、ただひとつだけわたしの頭に残っている記憶がある。それは、東京教育大学、熊本大学、信州大学、白鷗大学に勤務する間、幸運にもいい学友、友人、知人に恵まれて人生を送ることができたということである。もし、彼らがいなかったら、わたしの人生の半分はなかったかも知れないと思えるほど、彼らの力は大きかった。彼らがわたしの人生の半分を作ってくれたような気がする。多謝、多謝、多謝である。ここに彼らに心から感謝の意を表したいと思う。

さて、この4月から今まで経験したことのない新しい生活を始めることになる。時間と仕事による拘束のない自由な生活である。この自由な生活というのは、果たしてわたしに幸せと喜びをもたらしてくれるのであろうか。わたしはそれに期待していいのであろうか。結論はまだ出ていないが、残念ながら、正直に言えば、それにはわたしは極めて懐疑的である、と言わざるを得ない。なぜなら、人は、自由より仕事や時間に拘束されていた方がずっと楽である、と考えるからである。

最後に、白鷗大学の教職員の皆様にはこの6年間大変お世話になった。そのことに心から謝意を申し上げて、静かに白鷗大学を去りたいと思う。「本当にありがとうございました。」

(平成22年1月3日記す。)